

<編集部にて>の訳

- W: おはよう、マイアー君。
- M: おはようございます、ヴェルナー編集長。
- W: あら、ご機嫌がいいわね。いいことだわ。今日はノイシュヴァーンシュタインに行かせてあげましょう、マイアー君！
- M: それとバイロイトに。
- W: リヒャルト・ヴァーグナーと国王ルートヴィヒ II 世の足跡を訪ねてね。気をつけて行ってらっしゃい！
- W: ノイシュヴァーンシュタインはどうだった？
- M: そうですね、大変でした。入場券を買うのに長いこと待たなきゃならなくて。すごく長い行列ができてるんです。とくに日本人の！
- W: 長い行列？ それも仕方がないわね。ノイシュヴァーンシュタインとルートヴィヒ II 世は、日本でもとても有名なから！ だれもがフュッセンの近くにあるあのおとぎのお城のことを知ってるわ。
- M: ええ。でもノイシュヴァーンシュタインはそれほど古いお城じゃないんです。ドイツには築後およそ 1000 年にもなるような古い宮殿や城塞がたくさんありますけど、ノイシュヴァーンシュタインは 1869 年から 1886 年にかけて建てられたものですから。
- W: ようやく 1886 年に完成ということは、つまり 100 年少々しか経っていないわね。確かにそんなに古くはないわ。でもその代わり、それだけ豪華で華麗なお城ね。
- M: ええ、とても豪華です！ フランスの太陽王ルイ 14 世を手本にしてますから。バグダッド、中国、ペルシアなど世界中から宝飾品がここに集められたんです。あのたくさんの金、銀、宝石類は、もうそれだけで見ものです。
- W: そう、ルイ 14 世が手本だったの。お城がとても気に入ったみたいね、マイアー君。
- M: まあそうですね。とにかく印象的なお城ではあります。その折衷主義的な様式が…。
- W: 「折衷主義的な様式」、それは説明が必要ね…。
- M: そうですね、つまり、統一性がなく、ありとあらゆる建築および家具調度の様式から気に入ったものを選び出し、それをごちゃ混ぜにしてるんです。これは好みの問題ですけど。正直に言うと、そんなに多くの趣味ではないんです。それにどれほどお金がかかり、貧しい農民たちがその費用を税金で支払わなきゃならな

ったかということを考えて…。

W: マイアー君、あなたの好みとか、特に王制とルートヴィヒ II 世をめぐる社会的背景とか、そういうことは記事に書かないことにはしよう。それよりも観光用の記事を書け。

M: わかりました。観光という視点の中で、強調できることがひとつありますよ。お城がすばらしい場所にあるということですよ。山々に囲まれ、まったくの自然の中に建っているんです。

W: そう、山々の只中であって、当時はミュンヘンの町からも遠く離れていたのね。

<雑誌記事>の訳

ルートヴィヒ II 世

バイエルン国王ルートヴィヒ II 世が建てた最も有名な城と言えば、それは疑いなくアルゴイのフュッセン近郊にあるノイシュヴァーンシュタイン城です。この城は、ネオロマネスク様式で、1869 年から 1886 年にかけて建てられました。それは湯水のようにお金を使って豪華に建てられており、ドイツで最も人が多く訪れる城です。この「おとぎの城」を見るために、世界中の人々がバイエルンの山地にやってくるので

す。

ルートヴィヒ II 世は、さらに二つの城を建てました。すなわち、フランスのヴェルサイユ宮殿を手本としたリンドラーホーフ城、そしてキーム湖に浮かぶ島にあるヘレンキームゼー城です。

ルートヴィヒ II 世はまた、彼のリヒャルト・ヴァーグナー(1813-1883)に対する熱狂的な崇拜でも有名です。ルートヴィヒ II 世は、何年にもわたる財政的な危機のうち、ヴァーグナーをミュンヘンに呼び寄せました。しかし、ヴァーグナーはまもなくバイロイトに移ってしまいます。そしてそこで彼は、1872 年に自分の祝祭歌劇場をつくり始めたのです。ヴァーグナーは、オペラの刷新とその楽劇への変革に成功しました。彼のテーマは、主として、『マイスタージンガー』や『パルジファル』などのような中世の伝説や説話、あるいは『ジークフリート』や『トリスタンとイゾルデ』などのようなゲルマンの英雄伝説です。

バイロイトの音楽祭は、今日に至るまで、国際的なゲストがやって来て、毎年社交界のひとつの出来事となっています。(トーマス・マイアー)